町史とっておきの話 240

只見の歴史を探る③

南会津郡で初めて出土した漆器

只見町教育委員会
渡部　賢史

漆器とは、漆塗りの器のことです。漆器をつくるには、ものにもよりますが、漆の精製などを含めて、三〇～五〇もの工程があります。この数多くの作業を必要とする漆器が黒谷館跡から出土しました。今から四〇〇～五〇〇年前のものと推定され、南会津郡で初めて出土した漆器です。

黒谷館跡は、朝日振興センター周辺にある遺跡で、昔から館があったと言われていました。住所も只見町大字黒谷字館で、その存在は字名にもなっています。館（たて・やかた）は、ある程度の軍事的施設があり、権力をもった人が居住していた場所を指します。遺跡の時期は、文献の記録から一五〇〇年代（室町時代）と見られ、黒谷村の地頭・山内兵庫が住んでいたと伝えています。朝日村史には、図1のような絵図が記載されています。

朝日村史に記載されている黒谷館跡

平成二十四年に行われた黒谷館跡発掘調査事業では、縄文時代後期～弥生時代中期ころの土器が出土したほか、室町時代の終わりから江戸時代初めの漆器や木製品（下駄・桶など）が出土しました。漆器は、館跡の堀跡から発見されました。表土から一八〇センチの深さにある堀跡の底面に張り付いた状態で見つかったのです。つまり堀の作られた年代に近いと言えます。

さらに、この堀跡は、遺物の宝庫でした。桶の側面の板や底板、蓋（ふた）、箸（はし）、下駄などの木製品が多量に出土したのです。漆器の年代については、十六世紀から十七世紀のものと考えられます。八点の漆器が出土しており、そのうち状態のよい二点を紹介します。

▲ 写真１　鶴丸文が描かれた漆器

▲ 写真２　簡略化した鶴が描かれた漆器

一点目の漆器は、椀の底に鶴が描かれています（写真１）。鶴が羽ばたいている文様を略したもので、鶴丸文と考えられます。これは一乗谷朝倉氏遺跡（福井県福井市）から出土した漆器の漆絵に非常によく似た文様をしています。二点目の漆器は、薄くなって文様が非常にわかりにくいのですが、これも鶴が飛んでいる姿を簡略化したものと思われます（写真２）。これについては、清洲城下町遺跡（愛知県清洲市）から出土した漆器の漆絵に似ているものがあります。これら二点の鶴の文様は、家紋のようにも見えますが、縁起ものとして描かれたのではないでしょうか。

以上のことから、室町時代後期から江戸時代初期にかけての只見地方では漆器が生産または流通していたと推定できます。さらに、黒谷館跡からは、青磁（せいじ）という中国の焼物も出土しています。今までこの時代の遺物が少なく当時の生活ぶりがわからなかったのですが、他の地域にひけをとらない文化をもっていたと思われます。

この漆器は、保存処理を行い会津只見考古館で展示しています。ぜひ一度ご覧ください。